# 25［評論］　『自分ということ』

［１］　ふつうに「あいだ」という場合には、まず二つあるいは二つ以上の数の事物がすでに与えられていて、「あいだ」というのは、それらの事物の欠脱している空白部をさしている。①空白部はネガティヴな欠如の相においてしか問題になってこない。ところが、「われわれのあいだでは」や「機が熟さないあいだは」の例では、事情はかなり違っている。たとえば、「われわれのあいだではこの言葉は禁句だ」というような場合、この「われわれ」が個々にだれをさすのかは、かならずしもはっきりしていなくてよい。ただ、ある特定の言葉を口に出すか出さないかが、その人が「われわれ」の仲間に入れてもらえるかどうかにかかわる重大問題となってくる。この場合には、「あいだ」といういわばａアンモクのの場のようなものが、「あいだ」を取り巻く境界線を規定している、という感じがある。

［２］　「機が熟さないあいだは無理をするな」といういいかたでは、このｂケイコウがもっと強い。この「あいだ」がどこで始まってどこで終るのかは、けっして最初からきまっているわけではない。「機が熟する」という一種の歴史的・時間的な過程が進行していて、この進行が未完了であること自体が「あいだ」の本質的な意味内実であり、「あいだ」は、いわば自己自身に内在する過程の動きによって、この進行が完了したときに「あいだ」であることをやめることになる。②「あいだ」が何であるのか、「あいだ」がどこで始まりどこで終るのかは、もっぱら「あいだ」自身の自己決定にかかっている。

［３］　「あいだ」の原義が物の存在しない空白部をさすという解釈に私が疑問をいだいているのは、私の感触の中で、この「あいだ」（間）と、「あい」（合、会、相、逢）とが、どうしても重なって映ってくるからである。私の郷里の方言では、「あいだ」のことを「あいさ」あるいは「あわいさ」という。これは「あい」あるいは「あわい」から来たものだろうし、「あわい」は「あいあい」のつづまったものらしい。合・会・相・逢のいずれの漢字を当てるにしても、「あい」は二つあるいはそれ以上のものの集合・対面・合体・交流などを表している。英語でいえばtogetherであり、ドイツ語ならばzusammenである。「あいだ」には、元来いくつかのものがそこで「あい集まる」場所のような意味があるのではないか。あるいは、すくなくとも、古来の日本人は、物と物との「あいだ」をみたときに、空白をみてとるよりはむしろ、その両側にある二つの物の結びつきのほうに、より多くのこころを向けたのではなかったか。③「あいだ」には、もともと、連結とか関係とかの意味が含まれていたのではないのだろうか。

［４］　「あいだ」がこのようにして物と物との、あるいは人と人との「会い合う」場所であるとするならば、それと同じ「間」の文字を共有することになった「ま」のほうは、どういった感じで用いられることばであろうか。

［５］　「あいだ」は、これを欠落とみるにせよ結合とみるにせよ、いわばｃグウゼンの所与であり、しかも、「あいだ」の両側にある物と物、事と事を前景とするならば、いってみればそれらの背景として、あるいは図に対する地としてみてとられているということができるだろう。「あいだ」は、それを「あいだ」たらしめている二つの物や事と、同一の秩序組織には属していない。さきに挙げた、「われわれのあいだ」とか「機が熟さないあいだ」などの用例をみても、親密な関係を意味する「あいだ」でも、やはりそれは、表面に出ている人や物や現象に、裏面から絶えず作用を及ぼしている力の場のような感じであって、それ自体はけっして表面に出てこない。

［６］　これに対して「ま」のほうは、物の隙間であったり現象の中断であったりしながらも、あくまでもこの物や現象と同一平面上にあって、それらともどもに一つのまとまった秩序形態を、コンフィギュレイションを形成している。④「ま」は、それ自身、全体的秩序の不可欠の構成要素であって、その点では、それをとりまく物や、それの前後に生じている現象と、まったく同等の資格をもっているといってよい。そういった「ま」のｄケンチョな例は、建物の柱と柱との間隔であり、音楽における休止である。

［７］　柱と柱の間の空間や壁面、音楽の音と音の休止は、ただ単に「当然存在する」隙間という以上の、もっと積極的な役割を担っている、というべきだろう。それは、設計や作曲の段階から、すでに全体のプロポーションのなかにｅゲンミツに組み込まれ、個々の部分のアクセントの効果を計算しつくした上で、ある種の意志をもってはめこまれた「ま」である。だから、実際の建築や演奏にあたって、そこにこめられている意図に即して「ま」を正確に再現することが、この上なく重要な課題になってくる。たとえば、邦楽の演奏において「ま」のとりかたがいかに高等技術に属するかについては、かずかずの芸論の教えているところだし、西洋音楽の場合にも、本質的にはまったく同じことがいえる。

［８］　私事にわたって恐縮だが、私が学生時代にピアノを熱心に練習していたころ、ハイドンのソナタがどうしてもうまく弾けなかった。音符はそれほど難しいと思わないのに、曲が曲としてまとまらない。そんなときに、声楽を勉強している友人の伴奏者として、ある声楽の先生のところへレッスンについて行ったことがある。そのとき、その先生は、歌曲の一番の難しさは休止符から次の音へ移るところにあるのだ、というような話をして、サーカスの空中ブランコで、一瞬のタイミングのとりかたで墜落してしまうのと同じことだ、という説明のしかたをされた。私はそのとき、ハイドンの難しさも結局は休止符の「ま」のとりかたの問題であって、空中ブランコ式に、からだのリズムで「を入れない」一瞬の呼吸をつかまえる以外に、この問題は解決できないのだろうと痛感したことを、いまでもよくおぼえている。

［９］　「ま」というのは、元来は空間的なイメージ（柱と柱との間など）と結びついたことばであったのかもしれない。多くの辞典類にはとにかくそう書いてある。しかし、私自身の個人的な感覚からいうと、「ま」の真髄はむしろその時間性にあるようである。このような感じかたは、もちろん私の音楽体験と無関係とはいいきれない。だから、私はけっしてそれを一般化して主張しようなどとは思わないけれども、「ま」を活用したいろいろな日本語のイディオムを思い浮かべてみても、私のこの感触を否定するような材料はみあたらない。「まが抜ける」とか「まのびがする」とか「まもなく」とかの用例のことを考えてみれば、私のいいたいことがおわかりいただけるだろう。そして、これにくらべれば、「あいだ」のほうはなんといってもずっと［　　⑤　　］な感じが強い。それは、さきにも書いたように、私の感じのなかで「あいだ」のイメージと「あう」（会・合・相・逢など）のイメージがどこか重なりあっていることも関係があるのだろう。［　　⑤　　］といったのは、同時的ないし共時的というほどの意味である。二つあるいはいくつかの物が「会い合う」というイメージは、どうしても同時的・共時的なものとならざるをえない。

［10］　「あいだ」と「ま」との関係をもうすこし考えるために、もう一度音楽の例をひいてみたい。

［11］何人かで合奏する場合、技術にむらがあったり気が合わなかったりして、曲が気持ちよく進まないことがある。そんなときには、なにか自分がひとりで苦労して、楽譜にしがみついて演奏していたり、あるいは相手の演奏に合わそうとして、自分のリズムはそっちのけで、ただついて行くだけということになったりする。そんな合奏は、すこしも楽しくないし、音楽の生命であるはずの、湧きあがるような時間の感覚がすこしも味わえない。

［12］　それに対して、呼吸がよく合って気持のよい合奏ができている場合には、自分が自分自身の音楽を演奏しているのだという意識も、相手の音楽に合わせているという意識もなくなって、音楽がひとりでに作りあげられて行き、自分はそこで生成躍動している音楽的時間にまったく自然に関与しているという意識だけしか残らない。そんなとき、音楽は、完全にその何人かの「あいだ」で響いている。あるいは、音楽が自分と共演者との「あいだ」をすっかりみたしている、といってもよいだろう。⑥「人と人とのあいだ」が、単なる空白の隙間ではなくて、ずっしりと重みのある、実質的な力の場であるということは、こういった合奏の経験のある人なら、だれでもすぐに理解できることである。

［13］　ところで、合奏者の「あいだ」に生きいきとした音楽を響かせようとするならば、各奏者の呼吸がぴったり合っていなくてはならない。呼吸が合うということは、そこで鳴っている音楽についていうならば、「ま」のとりかたが合うということである。音と音とを合わせることは、ある程度の技術さえ持ちあわせていれば、さほど困難なことではない。合奏でいちばん難しいこと、またそれだけに合奏のいちばんの妙味は、音を合わせることよりも「ま」を合わせることにある。音楽の生命は、音符に書かれたひとつひとつの音にあるのではなくて、音と音の間の「ま」にはたらいている湧きあがるような時間のたわむれにあるのだから。

［14］　⑦日常の人と人との出会いについても、これと同じことがいえるのではないか。自分と相手との「あいだ」が、二人の真に「会い合う」場所となりうるためには、そしてこの「あいだ」の場所が、自分と相手との両者の「自己」を同時に成立させる自覚の場所となりうるためには、そこに「ま」と呼ばれるようなはたらきが十分にはたらいていて、二人がそれぞれ自己自身の歴史を生きていながら、その「あいだ」においては、共通の唯一の時間の生成に関与しあっている、ということがなくてはならないのではないだろうか。「自己が自己ならざるものに出会った、まさにその時に、ぱっと火花が飛散るように、自己と自己ならざるものとがなにかから生じる」（木村敏『人と人との間』）。この「なにか」が、さしあたり人と人との「あいだ」であるとするならば、「火花」は「ま」にあたるといっておいてよいだろう。

［15］　結局のところ、「あいだ」と「ま」との関係は、磁場と磁力との関係と類比的に考えることができるのではなかろうか。磁場を形成しない磁力はなく、磁力をもたない磁場はありえないのと同じように、「あいだ」が自己と他者との同時成立の場所、自己発見の場所でありうるためには、原時間的な契機としての「ま」のはたらきが不可欠の構成分となる。

●出題校

早稲田大学

●語注

コンフィギュレイション＝配置によって決まる形状、外形、輪郭。

原時間的な契機＝著者は、別の箇所で「原時間」という言い方について次のように説明している。「「ま」の本質は、ものとものとの、あるいはこととこととの「あいだ」にはたらく「機」であるといってはいけないだろうか。「機」とはそれ自体「はたらき」であり、「はずみ」である。「ま」はそれ自体時間なのではなくて、「時間」といわれるような実感をそのつど生み出す源泉であり、いわば発生機における時間、「原時間」ともいうべきものではあるまいか。」

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①とあるが、そうした「あいだ」の用例として最も適当なものを、次から選べ。（7点）

ア　生徒のあいだでは常識だ

イ　木々のあいだから空がみえる

ウ　夫婦のあいだにできた子ども

エ　彼が生きているあいだにどうにかしないといけない

オ　あの家では、親子のあいだがよくない

〔　　　〕

問２　傍線部②とあるが、その説明として最も適当なものを、次から選べ。（7点）

ア　「あいだ」は単なる通過地点ではなく、まず「あいだ」があって、その両側に始まりと終わりができたということ。

イ　「あいだ」がまず自身の性格をはっきりさせ、その役割を明確にすることで、その周囲の性質も明確になるということ。

ウ　「あいだ」はあくまで未完了の過程であるが、その過程の進行をどこで終了させるかの決定権を「あいだ」自身が有しているということ。

エ　「あいだ」の輪郭はそれなりに最初からあるが、「あいだ」は、それ自身が生成していく過程でその輪郭線を移動し、変化させていくということ。

オ　「あいだ」を成立させる枠組みがさきに確固としたものとしてあるのではなく、「あいだ」がその枠組みに作用を及ぼすということ。

〔　　　〕

問３　傍線部③とあるが、その説明として最も適当なものを、次から選べ。（7点）

ア　「あいだ」はそれそのものが重要なのではなく、その両側にあるものの関係性や結びつきが大事であるということ。

イ　「あいだ」は、単なる中間部ではなく、その両側のものが遭遇し、交流する場として大きな意味をもつということ。

ウ　「あいだ」は、それ自身としてはあくまで明白な性質をもたないが、だからこそ、その両側のものを近づけ、対面させる契機として価値をもつということ。

エ　「あいだ」は、その両側のものの出会いを可能にしつつ、それ自身が関係性のなかで積極的に変化していくということ。

オ　「あいだ」は、その両側のものを集合させる場として大切であり、そこで複数の物が合体し、新たな組織を生むということ。

〔　　　〕

問４　傍線部④とあるが、その説明として最も適当なものを、次から選べ。【読みのセオリー】（7点）

ア　「あいだ」がその両側のものの背景のような役割を演じるのに対し、「ま」は、同一平面上にある周囲の組織のなかにみごとに溶け込み、個別要素間の差異を消去して、組織の緊密化に貢献しているということ。

イ　「あいだ」があくまで二つのものの隙間であり、表面に出てこないのに対して、「ま」は連続性を成り立たせるものであり、その意味で、その前後の要素と同じ性質をもつようになり、まとまりのある秩序を形成するということ。

ウ　「あいだ」が関係性の領域として潜在的なものにとどまるのに対し、「ま」は表面に出て顕在化し、周囲のものと同じ資格を有して、個別要素間の全体的な関係性の構築において主導的な役割を演じるということ。

エ　「あいだ」が出会いの場として意味をもつのに対し、「ま」は、そうした出会いをその出会いの当事者たちにとって共通の出来事にし、そのように関係性を形成する点で、周囲と同等の価値を帯びるということ。

オ　「あいだ」は、その周囲のものがあってはじめて成り立つという意味で消極的な資格しかもたないのに対し、「ま」は、それをとりまく物と同様に積極的資格をもち、個別要素を総合した全体的秩序をみずから構成していくということ。

〔　　　〕

問５　空欄⑤に入る適語を、本文中から抜き出せ。（7点）

〔　　　　　　〕

問６ 傍線部⑥とあるが、その説明として最も適当なものを、次から選べ。（7点）

ア　ひとりひとりの演奏者が自分勝手に演奏するのではなく、各自のあいだに存在する譜面記号を忠実に音として再現することで、それぞれの正確な演奏が精密に合致する高度な音楽がもたらされ、それが大きな力を生み出す。

イ　ひとりひとりの演奏者が独自の内的なテンポで演奏しながらも、各自の演奏が火花を散らしつつうまく重なりあった結果として、奇跡的に音が合い、そこに唯一独自の結晶体としての力を有した音楽が湧きあがってくる。

ウ　ひとりひとりの演奏者が楽譜にしがみつくのではなく、互いの演奏に合わせようと配慮し、そのことで演奏者間にたぐい稀な調和が生まれ、そうして出来上がった力の総和が各自に共通する独自の音楽として結実する。

エ　ひとりひとりの演奏者が、たがいの演奏のあいだにある溝を埋めるべく、彼らのなかでも力量のある指導的な演奏者に合わせていくことで、一段上のレベルの演奏行為として、より力強いものとなった充実した音楽が湧きあがる。

オ　ひとりひとりの演奏者が各自のパートの演奏を自発的におこない、それがぶつかり影響を与え合う力の集合体となって、各演奏者に共通しつつ、しかも特定の演奏者に限定されない音楽がそこに生成する。

〔　　　〕

間７　傍線部⑦の「これ」とはどのような内容を指しているか。「あいだ」「ま」の二語を用いて、五〇字以内で答えよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａ暗黙　ｂ傾向　ｃ偶然　ｄ顕著　ｅ厳密

問１　イ

問２　ウ

問３　イ

問４　ウ

問５　空間的

問６　オ

問７　合奏者の「あいだ」に生きいきとした音楽を響かせるためには、各奏者の「ま」を合わせる必要があること。（49字）

■覚えておきたい語句

□２ネガティヴ……………消極的・否定的なさま。⇔ポジティヴ

□３機が熟す………………物事を始めるのにちょうどよい時になる。

□15原義……………………もともとの意味。

□27所与……………………与えられるもの。与えられること。

□30秩序……………………物事が整然とまとまり、順序や筋道が正しいこと。

□37ケンチョ……………………いちじるしいこと。きわだって目につくこと。

□40プロポーション………割合。比率。

□46恐縮……………………身がちぢまるほどに恐れ入ること。

□52間髪を入れない　間髪を入れず（ない）…すぐに。

□55真髄……………………最も本質的な部分。奥義。

□58イディオム……………慣用句。熟語。

□63共時的…………………似たような事象が同時に起こっているさま。

□66むら……………………物事がそろわないこと。

□92類比……………………関係の類似・同一性のあること。

□94契機……………………物事が発生・変化する要素、原因。きっかけ。

【読みのセオリー】

★例示を手がかりに、理解を深める

　抽象的な事柄の説明ほど、例などをあげて読者にわかりやすく伝わるように心がけるものである。例にひきつけて考えることで、理解がしやすくなる。

　本文では、「ま」の例として、「建物の柱と柱との間隔」や「音楽における休止」をあげている。

〔要　約〕

《段落相互の関係》

［１」〜［３］…「あいだ」の意味の考察

［４」〜［６］…「ま」の意味の考察

［７」〜［13］…「ま」を説明（例を用いて）

［14」〜［15］…人間関係における

　　　　「あいだ」と「ま」の考察

　　　　　↓

　自分と相手との「あいだ」が、「会い合う」場所、両者の「自己」を同時に成立させる場所となるには、「ま」と呼ばれるような、二人が自己自身の歴史を生きながら、共通の唯一の時間の生成に関与しあうことが必要。（99字）

〈筆者＆出典〉木村　敏（きむら・びん）一九三一（昭和６）年旧朝鮮生まれ。精神科医。専門は精神病理学。河合文化教育研究所主任研究員及び同所長、京都大学名誉教授。著書に、『時間と自己』『分裂病と他者』『偶然性の精神病理』『心の病理を考える』『木村敏著作集 全８巻』などがある。本文は、『自分ということ』（ちくま学芸文庫、二〇〇八年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊新問

問８　55〜56行目「『ま』の真髄はむしろその時間性にあるようである」とあるが、その説明として最も適当なものを次から選べ。

ア　「あいだ」が中間領域としての広がりを有している点で空間的であるのに対し、「ま」はその中間領域において二つの物を出会わせ、結びつけるという働きにおいて時間的であるということ。

イ　「あいだ」が複数の物の出会いの場として静態的であり、空間としてあるのに対し、「ま」はそうした場での出会いの過程として考えられ、つねに時を刻みつづける点で動態的であり、時間としての様態を帯びているということ。

ウ　「あいだ」においてはその両側のものが関係づけられるという点で空間的であるのに対し、「ま」はその関係性を実現させ、全体を形づくる契機という点で時間的であるということ。

エ　「あいだ」はその両側の物に対して欠損状態にあるという点で空間的であるのに対し、「ま」はその欠損状態を埋めるように縫い合わせていくという意味で、時間的であるということ。

オ　「あいだ」がその両側との関係で厳密に規定され、輪郭を与えられて空間化するのに対し、「ま」は、その周辺との関係で伸び縮みする性格があり、その意味で、時間的と見なせるということ。

［答］　ウ

＊新問

問９　本文中で用いられていないレトリックを次からすべて選べ。

ア　例示

イ　対比

ウ　省略

エ　比喩

オ　誇張

［答］　ウ・オ

■要約の方法

《本文を［１］〜［15］の形式段落で考える》

［１］・［２］　例をあげて、「あいだ」の意味を考察。

［３］　「あいだ」には、連結とか関係の意味が含まれていたのではないだろうか。

［４］　「ま」は、どういう感じで用いられることばか。

［５］　「あいだ」は、「あいだ」たらしめている二つの物や事と、同一の秩序組織には属していない。

［６］　「ま」は、物の隙間であったり現象の中断でありつつ、物や現象と同一平面上にある。

［７］　「ま」を例で説明。

［８］　筆者の「休止符」に関わる経験。

［９］　「ま」の真髄はむしろその時間性にある。

［10］　「あいだ」と「ま」との関係をもうすこし考える。

［11］・［12］　呼吸が合わない合奏、合う合奏の例。

［13］　呼吸が合うということは、そこで鳴っている音楽についていうならば、「ま」のとりかたが合うということである。

［14］　日常の人と人との出会いについて、「あいだ」と「ま」を用いて説明。

［15］　「あいだ」と「ま」との関係は、磁場と磁力との関係と類比的に考えることができるのではなかろうか。

　　　　　↓

《段落相互の関係》

［１］〜［３］で「あいだ」の意味を考察し、［４］〜［６］で「あいだ」と「ま」を対比的に説明。［７］〜［13］で筆者の経験に基づいて「ま」を説明し、［14］・［15］で人間関係における「あいだ」と「ま」のありかたを提示している。

■本文の要約■

自分と相手との「あいだ」が、「会い合う」場所、両者の「自己」を同時に成立させる場所となるには、「ま」が十分にはたらき、二人が自己自身の歴史を生きながら、共通の唯一の時間の生成に関与しあうことが必要。（99字）